

1 ポルトガル時代の長崎

その開港と町立てを中心に



林 一馬
HAYASHI Kazuma

長崎総合科学大学
名誉教授

現在まで発展してきた国際都市・長崎の基盤を築いたのは、16世紀中頃から来航したポルトガルによるものであった。長崎に新都市を形成することになった経緯や、都市計画にポルトガルが与えた影響とはどのようなものだったのだろうか。

大航海時代の渦中で

いわゆる大航海時代が始まるのは15世紀。その幕開けを先導したのは、ポルトガルやスペインの勢力（アジアでは特に前者）であった。アフリカ大陸南端の喜望峰を廻り、インド洋沿岸を經由し、マラッカ海峡を越えて、彼らからすれば文字通り「極東」に当たる日本にまで辿り着いたのは、16世紀も半ば近くであった。

この勢力の特徴は、新航路を開拓して海外に進出し、そこに新しい交流拠点や植民地を獲得して国際的な貿易販路を拡大するとともに、その地方にキリスト教を宣布することにあつたといえる。それゆえ、日本の場合にも、端的には鉄砲の伝来とキリスト教の伝来がほぼ同時的であったわけだが、結果的に見るとこの二つの側面が絡み合っていたところに、その比較的短期での終息が待ち受けていたといえなくもない。ともあれ小稿で扱うのは、16世紀中頃から17世紀前期にかけてポルトガル船が日本に来航していた時代と、その中で新しく形成された海港都市・長崎の草創期ということになる。標題を「ポルトガル時代の長崎」とした所以である。

長崎に到るまでの前史

ポルトガル船が来航するようになった当時の日本は、戦国時代の真っ只中であつて、すでに室町幕府による国家統治は形骸化していた。よつて彼らは、自力で日本のどこかに貿易と布教に資する安全な基地を求めざるをえなかった。同時に、彼らの東アジア全体の拠点たるマカオからの往還の容易さ、つまり短路を望むのも自然であろう。その結果、ポルトガル船の来航は次第に九州

探題・大友義鎮（宗麟）が支配する豊後の府内（大分）と、天文22年（1552）以降は主に松浦領の平戸といった北部九州に収斂してくるのは、それゆえの必然だったといえる。その地方の領主や有力者たちはキリスト教の布教を容認または擁護し、またそれ以上に貿易による利潤追求に積極的だったからである。

こうした情勢に割り込んできたのが、全国初のキリシタン大名となる大村純忠であった。大村領内ではイエズス会の意向を受け、永禄5年（1562）平戸に最も近い横瀬浦が開港されたが、1年後に焼討ちに遭い、廃絶となった。その後、平戸への回帰の動きも出たようだが、大村側が次に用意した港は長崎の西郊に当たる福田であった。しかしここは直接外洋に面し、大型船の長期停泊には不向きであった。そこで登場してきたのが、長崎である。



写真1 国際クルーズ船の来航が相次ぐ現在の長崎港（鍋冠山公園展望台から望む）



図1 「南蛮屏風」(大阪・南蛮文化館所蔵)に描かれた文禄2年(1593)頃の「岬の教会」。図中上部に見える建物群がそれに当たる。下部は位置的には合致しないが、ポルトガル船入港時の町の賑わいを示すものであろう(平凡社ギャラリー4「南蛮屏風」1973より転載)

長崎の開港と当初の町立て

日本側にはこの経緯を示す相応の史料は残されていないが、ルイス・フロイス著『日本史』(松田毅一・川崎桃太訳)には次のように記述する。なお〔 〕内は引用者の補筆である。

「ところで福田の港は適当でなく、〔公的な〕定航船はそこでさまざまな危険に曝されたので、司祭〔デ・フィゲイト〕はそれに代る、より安全な港を探し、ドン・バルトロメウ〔大村純忠〕の領内に留まっていた、それによって布教が援助され保護され得るようにしたいと望んだ。そこで司祭は数人の同行者とともに一人の水先案内を連れ、彼らとともにかの海岸のいたるところ〔を〕廻り、港口の水深を測量して、一番よいと思われるところを探すことにした。その際、彼らは、長崎の港が(自分たちの意図に)最も合致し適していることを認めた。そしてドン・バルトロメウとの必要な協定を行った後、司祭、および定航船の援護のもとに家族連れで住居を設けていたキリシタンたちは、その(長崎に)決定的で確乎とした定住地を創設し始めた」

この記事には年次が明示されていないが、長崎の地誌類はこれを一致して元亀元年(1570)のことだったとする。そして翌年の「元亀二年辛未、大村理専(純忠)家来友永対馬(守)と申(ス)者、見分の上、町割仕候」として、「嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町〔後

外浦町ニ加ル〕、横瀬浦町〔後平戸町ニ加ル〕の6ヶ町を上げる(ここでの引用は『長崎集』に拠る)。事実、この元亀2年(1571)には、長崎にとって最初のポルトガル船の入港が実現し、以後その地位をほぼ独占するに至ったのである。

ここに国際的な港市としての長崎が創設されたことは疑えないが、その詳しい内実は必ずしも明瞭でない。これには、長崎ではのちの寛文3年(1663)に市中の9割方を焼く大火があつたため、それ以前の同時代的な資料をほとんど滅失したという根本的な理由がある。

それゆえ実証的な説明は難

しいのだが、これまでの通説や先学による研究蓄積を踏まえつつ私見の概要を整理しておく、以下のようになる。

① この元亀元年以前にも、長崎近辺には在地勢力がなかったわけではない。とりわけ現在の市街地東部に位置する桜馬場・夫婦川一帯には、地頭として長崎甚左衛門純景が居て、すでに永禄10年(1567)にはその膝下に修道士アルメイダが布教に派遣されていた。そして同12年(1569)には後任の宣教師ヴェイレラが、長崎で最初の教会トードス・オス・サントス(諸聖人の意)を設立してもいた。彼らはもちろん海路も使っていたはずだから、長崎はすでに開港されていたとみなされる。すなわち元亀2年の「開港」とは、あたかも新大陸の「発見」と類似した趣意があつたということだ。

② しかし同時に、この開港に伴った新都市の建設には画期的な様相が認められる。ポルトガル側、とりわけフロイスも言うようにイエズス会の意向が優先していたことが留意される。事実、6ヶ町が位置する岬状の高台の突端部(現県庁の場所)には、当初から「岬の教会」が建ち、そこがイエズス会の本部とされていたようなのである。天正7年(1579)に巡察師として来日したヴァリニャーノは、そこが要塞化した修院であることを強調しているが(『日本巡察記』)、



図2 『寛永長崎港図』(長崎歴史文化博物館所蔵)の市街地部分。白地が内町、赤地が外町の領域を表わすが、この図自体は17世紀後半における推定復元図とみられる。図中に記入したA、B、Cの部分がそれぞれ町立て当初における岬の教会、6ヶ町、水夫町(下から順に樺島町・五島町・舟津町)の位置を示す



図3 もう一つの『寛永長崎港図』(長崎歴史文化博物館所蔵)に描かれた築造当初の出島の姿。表門がまだ江戸町側にあり、西側の水門部分に築き出しがない点が目立され、現存では最古の「出島図」といえる

実は単に隔絶した聖域であるにとどまらなかった。高瀬弘一郎氏の研究によるとイエズス会士が通商を仲介し代理する「(当時最大の輸出品だった中国産の)生糸の取引所」、つまりそこは交易の市場でもあったと考えられるのである。そしてこの岬の先端部を要塞化した姿は、安野眞幸氏も指摘するようにペルシャ湾の入口にポルトガル人が築いたホルムズ要塞の都市景観と酷似する。すなわちこの町立ての構想自体は、ポルトガル側にあった公算が高いと推断されるのである。

③ この推論が正しいとすれば、その前面に展開する6ヶ町とは、ここでの交易を目的に参集した各地の商人たちを主体とする、いわば「門前町」だったと解するのが適切であろう。その中には各地から逃れてきたキリシタンが多く居たにせよ、イエズス会士の誇張をまともに受け取るには及ぶまい。同時に、大村氏がこの町立てに果たした役割も、領主としての差配、つまり「町割」という調整的側面に留まると見るべきではないか。実際、その中に含まれる嶋原(有馬領の意であろう)町や平戸町は、それ以前からポルトガルとの交易実績をもっていた領外の人々の集積とみるほかないからである。また、外浦町は大村城下の郊

外という意味ではなく、横瀬浦町があることからしてもむしろ直前の福田港を指すのではあるまいか。さらに文知町が中国人名にもとづくかどうかは不詳としても、中国船の来航は当然にそれ以前の港から引き継がれていたに違いない。

④ 当初に町立てされたのは、大村氏が直接に町割を差配した6ヶ町に限るかどうか疑問といえよう。のちの内町に含まれる(本)博多町や豊後町などは、推定されるその性格からして間断なく立てられた可



写真2 高台の6ヶ町と港湾に面する樺島町(左手)を区切る崖の石垣遺構

能性が高いかと思われる。だが、その6ヶ町とそれ以外の町に、安野眞幸氏が想定されるような船宿の国籍的な違いがあったかは疑われる。それよりはむしろ、高台の崖下にあつて港湾に直面して並ぶ樺島町・五島町・舟津町の3町は、港市として欠くことができない「水夫町」として、しかもそれぞれポルトガル・中国・国内向けというように対象別に立てられていたのではないかと考えられる。

ポルトガル時代の終焉

こうして設立された国際的な港市・長崎は以後、曲折を経ながらも発展の一途を辿る。ただ大局的に見ると、その主潮は自治的な自由交易都市としての特性が、天下統一を成し遂げた豊臣政権による天正16年(1588)の直轄領化を契機に、次第に統制が強められ、「城下町」的な近世都市へと変容していく過程だったと捉えられよう。そしてその実状は、禁教政策によってキリスト教勢力を阻害し、通商行為としての貿易に特化すること、続けて海禁(鎖国)政策と連動してその貿易の主導権を日本側に取り戻すことだった、とあって大過ないであろう。

寛永11年(1634)、かつての「岬の教会」の跡を江戸幕府の奉行所が襲い、その真下の海中にポルトガル商人を封じ込める「監獄」としての出島を寛永13年(1636)に築造したのは、まさにポルトガル時代の終焉を告げる象徴的な出来事だったといえよう。さらに寛永16年(1639)にはポルトガル貿易自体を停止し、寛永18年(1641)に空き家となった出島には宗教的野心を伴わないオランダ商館を平戸から移転せしめて、あくまで貿易に固有の権益は堅守しようとした。しかし同時期には、迫害を生き延びた長崎や平戸の周辺地域に住むキリシタンたちは、その後2世紀以上に及ぶ長い潜伏の道を秘かに歩み始めてもいた。

この輻輳した歴史が長崎の独特な都市文化を彩り、今もその魅力に奥深さを与えていると感じる。

<主要参考文献(史料類及び論文は除く)>

- 1) 古賀十二郎『長崎開港史』1957、古賀十二郎翁遺稿刊行会
- 2) 原田伴彦『長崎 歴史の旅への招待』1964、中公新書
- 3) ディエゴ・パチェコ『九州キリシタン史研究』1977、キリシタン文化研究会
- 4) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』1977、岩波書店
- 5) 加藤章・外山幹夫他『わが町の歴史 長崎』1984、文一総合出版
- 6) 中村賢『近世長崎貿易史の研究』1988、吉川弘文館
- 7) 大村純忠顕彰事業実行委員会編『キリシタン大名 大村純忠の謎』1989、西日本新聞社
- 8) 安野眞幸『港市論 平戸・長崎・横瀬浦』1992、日本エディタースクール出版部